



運動指導における動きのコツ意識の把握： ピッチャーの投球動作について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-09-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 富田, 続, 佐藤, 徹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00005897

運動指導における動きのコツ意識の把握

— ピッチャーの投球動作について —

富田 続・佐藤 徹*

北海道教育大学札幌・岩見沢校 保健体育研究室

*北海道教育大学岩見沢校 スポーツ教育課程

Grasp of Consciousness of Movement in Sport Coaching

— On the Pitching Motion —

TOMITA Tsuzuki and SATO Toru*

Department of Physical Education, Sapporo and Iwamizawa Campus, Hokkaido University of Education

*Department of Sport Education, Iwamizawa Campus, Hokkaido University of Education

概 要

運動指導の現場では、動きのコツの伝承が日常的に行われている。しかし、動きのコツは主観的であり、ある選手のコツがそのまま公的なコツとして認められるわけではない。私秘的なコツを運動指導に活用するためには、指導者ならびに学習者の運動感覚意識の構造分析が不可欠である。そこで、北海道教育大学岩見沢校硬式野球部に所属する投手5名を対象とし、変化球の投球動作を分析し、また投球時の運動感覚をインタビュー調査を通して聞き出すことにより、変化球のコツ意識の内実を探り、さらにその伏在するコツ伝承の問題を考察した。

I. 緒 言

運動ができるようになることは、いわゆる動きのコツ、つまり「自我中心化的身体知」^{注)}を身につけることを意味している。コツについて金子^(6-p.220)は、「自らの身体を動かして、何らかの行為をうまくやり遂げる時に、その『動きかた』の要を自らの身体で了解していること」と述べている。つまり、コツは、私の身体において運動感覚的統覚

として発生するものである。ここでいう私の身体とは動くことと感覚することが同時に現れる、メルロ・ポンティ^(14-p.233)の意味での「現象的身体」であることはいうまでもない。

この私の身体に発生するコツとは、個人的・主観的なものであるため、誰にでも通用するとは限らない。それでもスポーツの現場において、コーチから選手へのコツの伝達は、指導の中核であることは紛れもない事実である。

したがって、指導者から学習者へ動きのコツが伝えられる過程については、身体的条件や志向的地平までも含めて考察することが、意識をもった人間を対象とした運動指導についての研究には不可欠となる。そこに焦点をあてた検討がなされない場合には、コーチから選手への一方通行型、あるいは指導者の自己満足型の運動指導から脱却することはできない。例えば、学校体育において逆上がりができない生徒に対し、模範やビデオ映像を見せたり、ありきたりな説明を与えたうえで、できるようになるかならないかは生徒の努力や能力のせいにするような、いわば責任放棄的な指導である。

私密的な運動感覚的了解としてのコツを生徒や選手につかませるためには、学習者の志向的内実を探る指導者の努力が不可欠である。しかし、そのような視点から具体的な運動事例について探った研究は少ない。

そこで、本研究では、投手の投げる変化球に関して、個人が持つコツ意識の内実を探り、そのコツにどのような特徴があるのかを調査するとともに、言語では表現されない暗黙的なコツについて検討を進める。それによって、意識と動きの関連構造を探ることができると考えられる。

II. コツの意識化について

1) コツが生まれる場としての動感運動

動きのコツは、実施者の体験意識であることから、物体としての身体運動のメカニズムの客観的説明とは異なる。コツ体験は人間固有の現象であり、それが生まれる場は生命ある人間による動感運動である。

ここでいう動感とは、文字通り、「動く感じ」である。この言葉は、金子^(4-p.24)が現象学の祖フッサールの「キネステーゼ」(kinästhesie)の概念を援用し、日本語に置き換えた語である。

キネステーゼとは、フッサールが運動を意味するキネーシス(kinesis)と感覚を意味するアイステーシス(aesthesia)を合成したドイツ語である。

キネステーゼは直訳すると「運動感覚」となるが、心理・生理学的な運動感覚から区別するために、フッサールはキネステーゼ(動感)という言葉を用いたのである。ラントグレーベ^(8-p.188)は、キネステーゼは、「感覚であると同時に、感覚をひきおこす運動の意識、つまり、われわれによって発動されたわれわれの運動である運動の意識」であると述べて運動と感覚における意識の意義を強調している。つまり、ここでいう運動とは、まさに今動いている自分自身の運動を表しており、この運動と感覚(知覚)の関係は、隔たりを有しているものではなく、運動している時には感覚し、感覚している時には運動をしているというように、常に同時性を持つ意識であり、ヴァイツェッカー⁽¹⁸⁾の意味でのゲシュタルトクライス理論が示すものであるといえる。

ここで対象となる身体について、金子^(4-p.2.p.24)は「今ここに息づいて動きつつ感じ、感じつつ動ける身体」と述べ、さらにこの動感身体による運動については「生き生きと運動する私の生身にありありと感じられる〈身体性〉を含意した運動」と述べている。つまり、誰かもしくは何かの抽象的・物理的運動ではなく、自分自身の身体による生きている運動といえる。

2) コツの意識化

われわれは、運動を上手く行うために「こんな感じで動く」というように動きのコツを何らかの言葉でつかんでいることが多い。ここでは、佐藤^(16-p.22)が述べているように、「うまくできるためにはどのようにしているのか」という技術的な内容を意識することをコツの意識化と定義する。

ある運動を上手くできる者の中にも動きかたのコツを意識することができる者がいる一方で、自分がどう動いたかわからず、動きかたのコツを意識することができないという者もいる。両者共に、外的視点で見ると運動を上手く行うことができているといえる。しかし、当人の意識においては大きな違いが存在している。ここで言えることは、意識できているかどうかは、運動が上手くできる

かどうかを示す直接的な指標となるわけではないということである。

しかし、その運動を他者に指導する場合にはコツを意識できていることが前提となる。というのは、一般に指導者は、自らの意識化されたコツを基に指導を行うからである。

しかし、佐藤^(16-p.26)が指摘しているように、「運動に熟練した者が、必ずしも指導に役立つ運動感覚意識を持っているわけではない」という点に運動指導の難しさがある。このことは、名選手が必ずしも名コーチになるわけではないといわれてきたように、素晴らしい成績を残してきた選手がコーチになった時に、プレーの中で獲得した自らの運動感覚意識をそのまま他の選手に示したとしても、うまく理解されるかどうかは、別問題であるということの意味している。

Ⅲ. 研究方法

本研究では、運動指導や運動習得に重要と考えられる動きのコツ、特に変化球であるカーブとスライダークツの内実を探るために、次のような手順で調査を行った。

まず、対象者にストレート、カーブ、スライダー（対象者の中に一人、カーブを投げることのできないと申告した選手がいた）を投球させ、その時の感覚を聞き出した。また、投球時に感覚を意識できるようにするため、対象者に自らの身体の動きに注意を向けるように指示した。

次に、個別に球種ごとの感覚についてインタビュー調査を行った。これは、インタビュー調査によって聞き出したカーブとスライダーのコツ意識を、それらが持つ特徴や類似性などについて検証し、どのようなコツを基にそれぞれの変化球を投球しているのかを明らかにするためである。

調査対象者は、北海道教育大学岩見沢校硬式野球部に所属する投手5名である。また、調査対象者を正面と側方からビデオ撮影し、投球フォームの分析資料とした。

今回調査を行った変化球の球種、および球質に

ついては、筆者自らが捕手の立場で実際に捕球をしながら、カーブもしくはスライダーであると確認をした。

質問項目は以下のとおりである。

- ・球種ごとの投げ方に関する感覚意識について
- ・投げた時に良いと感じた時と悪いと感じた時の感覚の違いについて
- ・表現された動きのコツ意識が、どのような身体の動きを表すものであるか
- ・これまでに対象者が指導者から受けてきた指導方法について

これらの質問によって、対象者の持つ変化球におけるコツに関する情報や変化球習得の方法等の情報を得た。

Ⅳ. 結果と考察

1. 意識化されていたコツ

対象者	カーブ
A	・親指でボールを上を押し出す感じ ・少し手前に引いてくるイメージ ・パッとボールが放れる
B	・スポンと握りの中から抜く感じ ・打者に向けて投げる感じ
C	・中指と親指に力を入れる ・上にスポッと抜く ・手首を立てる
D	・抜く感じ ・リリースポイントで手首をコックする ・横に捻る
E	(カーブを投球できなかった)

表1 カーブのコツ表現

対象者	スライダー
A	・右下に人差し指と中指を切るイメージ ・手首は立てて空手チョップみたいにする
B	・人差し指と中指で縫い目を切る感じ
C	・中指と親指に力を入れる ・思いっきり腕を横に振る ・ちょうどいい横振り
D	・ストレートのように腕を速く振る ・切る感じ
E	・ストレートとイメージは変わらない ・空手チョップのイメージで中指で切る感じ ・小指から投げる

表2 スライダーのコツ表現

1) 意識の対象

ここでは、「自らの運動体験を意識的に観察する」活動としての自己観察^(12-p.37)において、コツ意識がどのような対象に向けられているのかを確認する。

対象者の言語表現からは、「ボールを切る感じ」や「手首を立てるように」、「スポッとボールを抜く」などが見られた。身体の動きに対して、細かく述べることのできる選手とそうでない選手がいたが、佐藤^(15-pp.15-20)が指摘するように、詳しく自らの動きを表現できるからといって、直接的に技能が高いというわけではない。

今回のコツ意識の表現には、野球選手にしか理解できないようなものが見られた。例えば、「ボールを切るように」という表現は、切るという言葉の意味をそのまま表したのではないのは当然である。大辞林⁽¹⁰⁾では、「切る」の意味を「刃物などを使って、続きのものを分離させる。断ち分ける」と定義されている。つまり、野球選手が意図する手首を立てて素早く腕を振るという意味とは、異なるものであるといえる。つまり、ここでは一般的な意味を超えて、特異な意味がその表現には付与されていることになる。つまり、感覚に響く表現が用いられている。

① カーブについて

今回試技の前に、選手に対して身体の向きやバランス、また手や指、肘の動きに意識を向けるように指示をした。これは、佐藤^(8-p.20)が指摘するように「自分の運動の成り行きについて分かるためには、前もってその運動局面、あるいは身体姿勢に関して何らかの注意が向けられなければならない」ため身体を意識させることで自己観察をスムーズに行うことができるように意図したものである。

対象者が言語で表現したものを個別に見て行くと、対象者Bの「打者に向けて投げる感じ」というものはコツというよりは、カンを表している表現だといえる。カンとは、「身体をとりまく状況に動感志向を投射化する作用が前景に立つ」もの

であると金子^(5-pp.24-25)は述べている。例えば、凍った道を歩くときに、普段より歩幅を狭めて、足裏全体で接地しようとするのは、カンが働き普段通りに歩くと転倒の恐れがあると判断したため、動きを変化させているのである。つまり、カンとは周りの状況に意識が向いている状態といえる。ただ、このカンは、「身体中心化の作用で姿を現すコツ」と区別されるといっても、両者は「統一的な私の身体によって生み出される創発身体知の表裏的な志向体験」であると言われ、二つを完全に切り離して考えることはできないと金子^(5-p.24-25)は説明している。

どの対象者も、試合などで投球を行う場合には自分の身体がどのように動いているかということは、ほとんど意識することはないとインタビューで述べていた。つまり、試合において、通常はカンが前面に出てきており、動きに何か不具合があるとコツに意識が向かうといえる。

カンが、意識の前面に出てきているときには、コツに対する意識は後ろに隠れている。これは、カンとコツが持つ相互隠蔽原理のためである。このことについて金子^(6-pp.229-230,5-p.29)は、「カンはコツとのあいだに差異化の関係を保ち、そこでは、現実の動感意識の〈現れ〉と〈隠れ〉の相互隠蔽という差異化現象が立ち現われてこそ現実の身体運動に関わることができる」と述べている。この相互隠蔽という現象は、私たちが運動を行うときには、常に存在している。例えば、テニスで何とかボールを相手コートに返すことができるレベルの初心者では、カンが働きコツは受動的地平に隠れているため自分自身がどう動いているかには、ほとんど意識は向けられず、ボールの動きや相手のコートに対して意識が向けられている。この初心者に対し、打ち方など、身体操作について指示すると、自分の動きを意識するあまり正確に返球できなくなってしまうことがある。これは、コツに意識が向けられ、ボールやコートに対するカンが機能しなくなったため、うまく返球ができなくなってしまうといえる。

その他の表現について見て行くと、自らの身体

の動きに関するコツが示されていることがわかる。これらの表現を指導書にあるカーブのコツといわれているものと比べると、「手首で抜く感じ」^(3-p.89)であるとか、「親指に力を入れて」^(3-p.20)、「ボールを捻る」^(11-p.20)という表現が共通していた。この指導書に示されているコツも、今回の対象者のコツについてもカーブを既に投げることでできる選手が持つ意識である。このように、既にコツを身につけたとしても、その運動を行うために必要なコツを全て表現できるとは限らないといえる。つまり、ある運動を身につけていく過程において、身体の細部まで意識を向けなくても動けるようになるのである。この意識が向けられていない動きの中に、その運動を行うために必要不可欠なコツが存在している場合も考えられる。佐藤^(16-p.26)は、「ある運動がうまくできるようになった者たちに動きのコツの内容を尋ね、共通した点を一般妥当的なコツとして引き出そうとしても、初心者の指導に役立つ内容が出てくるとは限らない」と指摘し、運動を指導する時には、意識に上ってこないコツについても考慮していかなければならないことに注意を喚起している。

② スライダーについて

対象者のスライダーに関するコツ表現を指導書などに記されているコツ表現と比べると「ボールを切る」^(11-p.91)や「小指をホームベースの方向に向ける」^(17-pp.48-49)、「動きは、ほぼストレートと同じ」^(17-p.42)というような類似した表現が見られた。指導者が選手にコツを教えようとした時に使った言葉と指導書に載っている変化球のコツ表現とは、かなり似通ったものであったと考えられる。対象者に、変化球の習得の仕方について質問をしたところ「指導者に動く感じを教えられた」や「本などを読んで動きをイメージしながら、実際に投げてみて感覚をつかんでいった」という返答があった。つまり、指導者が持つコツ意識と指導書にあるコツには、同一の表現が用いられているといえる。

対象者の中に、指導者からスライダーのコツと

して「ボールを切るように」と教えられた者がいたが、「切る」という感じをどうしてもつかむことができなかったと述べていた。その後、投球をしながらスライダーのコツについて自ら試行錯誤をしている間に、「切る」ではなく「潰して、グリッと」が最もスライダーのコツを表現したものであると気がついたと語っていた。つまり、ここでは指導者が考えている「切る」が表す動きと対象者がイメージした「切る」という動きに感覚的な違いがあったと考えられる。金子^(4-p.57)は、優れた指導者の特徴について「生徒や選手の動感身体に共感し、動感形態の促発分析能力に優れている」と述べている。つまり、指導者は自らが持つ感覚をのみを用いて指導を行うのではなく、学習者が実際に運動を行っていた時の感覚に共感し、その感覚に対応する形で指導することが必要不可欠であるといえる。

2) 言語表現と動きのイメージ

ここでは、カーブとスライダーのコツ意識が表す動きの具体的なイメージについて確認する。

① カーブについて

言語表現	動きのイメージ
「ボールを抜く」	・上方向へ放す ・腕を身体の方に持ってくる ・手の甲を捕手へ向ける
「手前に引いてくる」	・腕を身体の方へ引いてくる ・肘を巻き込む
「親指に力を入れて上へ押し出す」	・上方向へ放す ・手の甲を捕手に向ける

表3 カーブの言語表現と動きのイメージ

カーブのコツ意識の中にみられた「抜く」という表現は、上方向へ放す、腕を身体の方に持ってくる、手の甲を捕手へ向けるという動きを表していると対象者は述べていた。

次に、「手前に引いてくる」という表現のイメージについては、腕を身体の方に引いてくる、肘を巻き込むなどが挙げられた。つまり、ボールをリリースした後に投球腕を前方へ振るのではなく、足元や左の脇腹辺りに向け腕を曲げようとする動

きであるといえる。

「親指に力を入れ上へ押し出す」が示す動きのイメージは、上方向へ放す、または手の甲を捕手に向けるというものである。ここでいう上方向へ放すという動きは、ストレートのように人差し指と中指の指先でボールをリリースするのではなく、手の甲を捕手の方へ向けるようにしながら人差し指全体に引っ掛けるようにボールをリリースすることである。

カーブの「手の甲を捕手へ向ける」動きとは、図1のような手の向きになる。

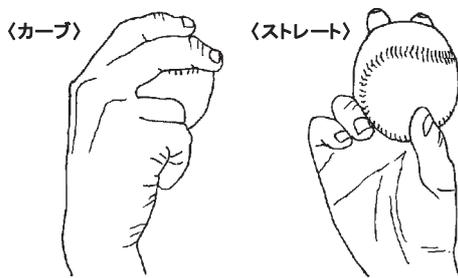


図1 握り方の違い

ストレートの手の向きと比べると、手首を90度近く回転させていることがわかる。ただ、実際の動きを見ると、手の甲は完全に捕手方向を向いているわけではなく、このことについて対象者の中には、「意識していたより、手の甲が前に向いてなかった」と述べる者もいて、若干意識とは違いがあることも分かった。

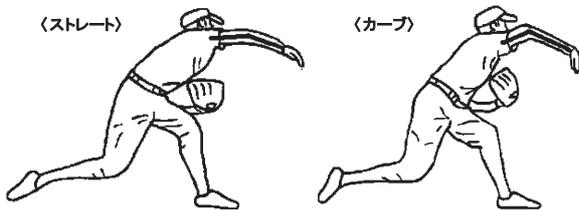


図2 カーブとストレートの肘の動き

次に、「手前に引いてくる」、つまり腕を身体の方へ引いてくるという動きは、図2に見られるようにカーブを投球した時の腕が、ストレートを投球した時に比べて、曲がっていることを表す動きといえる。

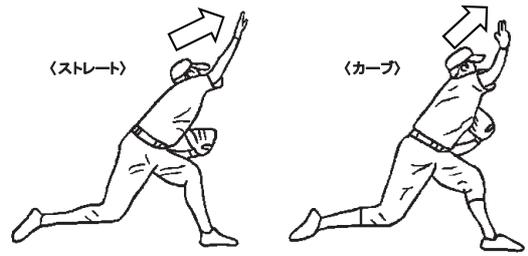


図3 上へ押し出す動き

また、「上へ押し出す」というコツ表現の具体的な動きのイメージについて、対象者は上へ放すようなイメージであると述べていた。このコツ表現の動きは、図3のようにストレートに比べ、カーブのリリースポイントが身体に近い位置にあることだといえる。つまり、ストレートがより前方(捕手方向)でリリースする感覚があるのに対し、カーブは身体の近くでリリースする感覚があるということを説明している。さらに、カーブは指先でボールをリリースするのではなく中指や人差し指の全体を使ってリリースするため、「上へ」という意識が見られるのではないかと考えられる。

② スライダーについて

言語表現	動きのイメージ
「ボールを切る」	・手首を横向きにする ・腕を素早く振って投げる
「空手チョップ」	・小指を前に親指を後ろにする ・速く腕を振る

表4 スライダーの言語表現と動きのイメージ

「切る」という表現が意味する動きのイメージとして、手首を横向きにする、素早く投げるなどが挙げられていた。素早く投げるとは、言葉の通り、特に意識して腕を速く振ろうということである。この動きに関して対象者は、ストレートよりも腕を速く振るようにすると述べており、ストレートの腕振りと比較してスライダーはより腕を速く振るという感覚があることを表している。また、手首を横向きにするとは、図4に示したように捕手から見た場合、ストレートのようにボールが正面を向いているのではなく小指が前面に見えるような向きである。

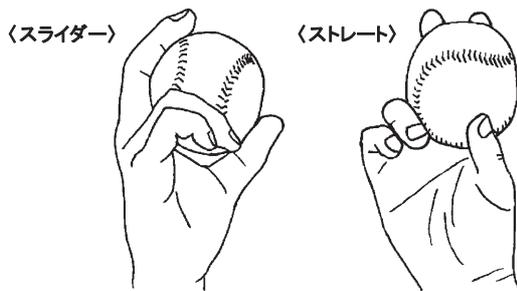


図4 スライダーとストレートの握り

「空手チョップ」という表現のイメージは、「切る」という表現とほぼ同じ動きを表していることがわかった。動きとしては、小指を前に親指を後ろにする、速く腕を振るなどが述べられていた。特に、この「切る」と「空手チョップ」は、表現としての違いは見られたが、表している動きの内容には類似性が認められた。

このようにコツ意識とその具体的な動きを表すイメージの対応を検討していくと、同じ言語表現が使われていたとしてもイメージしている動きに違いがあることがわかった。また、違う表現でも同じ動きを表している場合があることも、対象者の言葉から理解された。つまり、言葉を用いた指導を行おうとした時には、指導者は常にこのような表現と動きのイメージに関する問題が存在していることを把握していなければならない。

2. 意識化されていなかったコツ

ここでは、意識化されていなかったコツを検証していく。既に述べたように、意識化されていなかったというのは、知覚できなかったということの意味するものではなく、運動を行った人が動きの感じを言葉にできなかったということを表すものである。

1) 暗黙的なコツと運動の負担免除

意識化されていなかったコツを検証して行く前に、暗黙的なコツと運動の負担免除について説明を加えておく。ここでいう暗黙的なコツとは、マイケル・ポラニー⁽¹³⁾が主張する「暗黙知」の次元にあるコツと理解することができる。ポラニー^(13-p.15)

は、「我々は語ることができるより多くのことを知ることができる」と述べ、知識として持っているものの全てを言葉として表現することはできないことを説明している。

この暗黙的なコツは、運動の負担免除の原理と密接に関係している。人間の運動は熟練の程度に応じて意識の役割が減少することを「負担免除」という概念で説明したゲーレン^(2-p.58)によれば、習慣となった行動は「意識介入を要せずに、経験を蓄積し、安定化することができる。」

また、マイネル^(9-p.419)は、「熟練者にとっては、自分がどのように合目的に動いているかを知るためには、いわゆる“遠隔感覚”，特に目の助けによるわずかな定位で十分なのである」と述べ、さらに「熟練者はほとんどすべての運動系の可能性を駆使できるので、細かいことに苦勞して関わり合うことから大いに軽減されている」と説明している。このことは、何らかの運動を行うときに、その運動が洗練化され、自動化していれば、動こうと志向するだけで、身体の細部の動きにまで意識を向けなくても動けるようになることを表している。さらに、「熟練の増大は負担軽減の増大を意味し、最高の達成に対してエネルギーを完全に集中して投入するのを可能にするものである」^(9-p.419)と述べ、熟練していくことにより、さらに高い次元へと到達することが可能であると示している。つまり、歩きながら携帯電話を操作することが可能なのは、この負担軽減の原理が働き、歩行時には身体の動きに対して意識を向ける必要がないところまで熟練し、自動化しているためであるといえる。

ある運動が上手にできる熟練者のコツを初心者に伝えるという活動はさまざまな場面でみられるが、コツというものにおいて、そこに暗黙的なコツが存在することを忘れてはならない。負担免除という人間の持つ性質から、運動ができる人は、言語表現できるコツの他に必要不可欠な多くのコツを暗黙知の次元で身につけているからである。つまり、初心者を指導する場合には、ある運動に関わるすべてのコツを伝えなければならない

め、指導者を含めた、熟練者のコツ意識のみでは不十分であると考えられる。

2) 意識化されていなかったコツの例－カーブに関して－

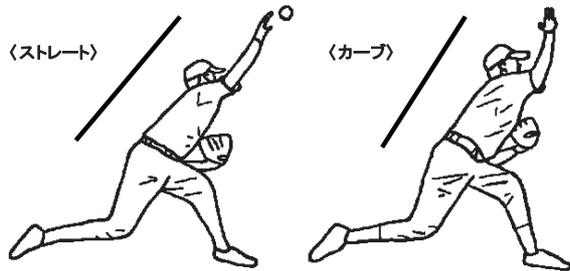


図5 上体の傾き

カーブのコツ意識の表現としては、手や腕などの動きに関するものが多くみられたが、ここではコツ意識として表現されていなかった上体や腕などの動きについて検討する。つまり、対象者が意識をせずに行っている可能性のある動きについて検証していく。

図5を見ると、ストレートを投球する時は上体が前方へ倒れているのに対し、カーブを投球する時の上体は立ったままであることがわかる。また、これらの動きは、対象者のコツ意識の中に見られなかったものである。カーブは、ストレートのように上体を前方へ移動させると腕や肘を上手く使うことができず変化させることが難しいのではないかと考えられ、腕を効率よく動かしボールを変化させるために上体を立てたまま投球しているのではないかといえる。また、リリース付近でストレートは胸が左前方へ向いているのに対し、カーブは捕手方向、つまり正面を向いていることもわかった。これも、腕や肘を上手に使うための動きではないかと考えられる。

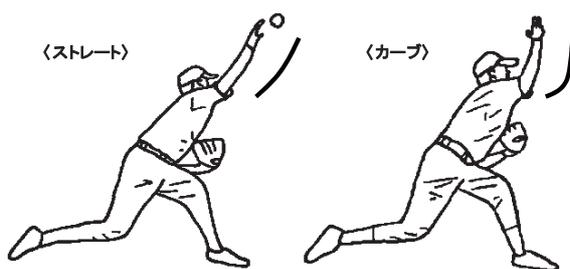


図6 肘の動き

ボールリリース付近の動きを示す図6を見ると、ストレートとカーブでは、肘の曲がり方に違いがあることがわかる。ストレートは、ほぼ真っすぐに伸びているが、カーブはやや曲がっている。ストレートは、ボールを人差し指と中指の指先を使って前方へリリースするため、肘を真っすぐ伸ばし力を加えていると考えられる。一方で、カーブは人差し指にボールを引っ掛けるようにリリースをすることから、肘を伸ばしながらリリースを行っているのではないかといえる。

この事例からもわかるように、熟練者が全てのコツを顕在的に把握しているわけではないといえる。初心者に運動指導を行う場合には、熟練者によって表現されたコツのみを指導内容とするのではなく、顕在化していないコツについても分析していく必要がある。

V. 結 語

本研究では、運動熟練者の動きのコツ意識について、運動実施と運動感覚意識に関するインタビューを通して調査した。

意識化され、言語的に表現されたコツを集め、実際の動きと比較することで、選手たちが抱えているカーブやスライダーの運動感覚意識を把握することができた。これらの選手の運動感覚意識を基軸にして、指導者は自らの体験内容と擦り合わせながら指導を行うことが必要である。そうすることで、選手の動きの外形的欠点を指摘するだけのような一方的な指導ではなく、指導者と選手が相互に関わりを持つ指導を行うことができると考えられる。

しかし、動きのコツは言語的に表現されたものだけではなく、暗黙的に、つまり受動的に（自我の関与なしに）把捉しているコツもある。熟練者が持っている、習慣化し意識されていないコツの中には、初心者にとってはきわめて重要なコツがあるとも考えられる。初心者の運動学習にとって中核となるような基礎的なコツが身につけていない場合には、熟練者のコツ意識をどれほど入念に

説明しても動きの発生にはつながらない。したがって、指導者は、コツとして明確に意識された動きだけではなく、無意識的な運動感覚の存在を探る努力をしていくことが重要である。

「注」

自我中心化的身体知とは、発生論的運動学における学習者の運動発生に関わる創発身体知に含まれるものである。金子^(6-p.462)は、創発とは、「その個人の運動感覚に新しいメロディーが流れて、新しく一つの運動形態が創出されること」であり、さらに、身体知は、「動ける感じをとらえる能力」^(4-p.34)であると説明している。つまり、創発身体知とは新たな運動形態を創出するために必要な動ける感じをとらえる能力であるといえる。

この創発身体知の一領域として、金子^(4-pp.336-342)は形態化身体知というものを取り上げている。ここでいう形態化とは、「多様な動感素材に一つの形態を与えて意味づけする統一的な作用が意味される」ものであり、さらに「統一的な意味づけによって、動感形態の発生、よりよくいえば、動感的な志向形態の形成が含意されて」^(5-p.20)いる。

この形態化身体知は、コツ身体知とカン身体知に区別される。本論で問題とする自我中心化的身体知は、俗称としてコツ身体知とも呼ばれ、「コツを生み出すために多様な動感素材を自我身体に統覚化し、それに意味づけをする志向形態化」^(5-p.32)していくものである。約言すれば、自我中心化的身体知は、私の身体において動きかたのポイントであるコツをつかみ、自らで動けるということである。また、コツをつかむために動いている感覚をとらえ、その感覚の中で重要なものとそうではないものを取捨選択しながら、動きの感覚をコツとして統覚していく能力であるといえる。

参考文献

- 1) ベースボールマガジン社編 (2007) 変化球バイブル. ベースボールマガジン社
- 2) アルノルト・ゲーレン：池井望訳 (2008) 人間. 世界思想社
- 3) 池田哲雄編 (2009) ダブルピッチ有の変化球バイブル. ダブルピッチ有監修. ベースボールマガジン社
- 4) 金子明友 (2005) 身体知の形成 (上). 明和出版
- 5) 金子明友 (2005) 身体知の形成 (下). 明和出版
- 6) 金子明友 (2002) わぎの伝承. 明和出版
- 7) 金子明友・朝岡正雄 (1990) 運動学講義. 大修館書店

- 8) ラントグレーベ：山崎・甲斐・高橋訳 (1980) 現象学の道. 木鐸社
- 9) クルト・マイネル：金子明友訳 (1981) スポーツ運動学. 大修館書店
- 10) 松村明編 (1999) 大辞林. 三省堂
- 11) 中村好志 (2007) ピッチング革命. 永岡書店,
- 12) 日本体育学会監修 (2006) スポーツ科学事典. 平凡社
- 13) マイケル・ボラニー：佐藤敬三訳 (1980) 暗黙知の次元. 紀伊國屋書店
- 14) メルロ・ポンティ：滝野静雄・木田元訳 (1976) 行動の構造. みすず書房
- 15) 佐藤徹 (1999) 運動学習における自己観察活動の構造について. スポーツ運動学研究, 12
- 16) 佐藤徹 (2007) 指導者の運動感覚意識覚醒の意義と方法—アンダーハンドの指導事例に基づいて—. スポーツ運動学研究, 20
- 17) 手塚一志 (2009) 変化球習得メソッド. 高橋書店
- 18) ヴァイツゼッカー：木村敏・浜中淑彦訳 (1975) ゲシュタルトクライス. みすず書房

(富田 続 札幌校大学院生)

(佐藤 徹 岩見沢校教授)